

第17回白壁賞は八尾建史氏らが、 第36回村上記念「胃と腸」賞は 江頭由太郎氏らが受賞

晩秋とは思えぬ暖かな陽気の2011年11月16日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第17回白壁賞と第36回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第17回白壁賞は八尾建史・他「0 IIb に対する進展範囲度診断—通常内視鏡・境界不明瞭病変に対する拡大内視鏡の有用性と限界：フルズーム派の立場から」(「胃と腸」45: 86-100, 2010)に、第36回村上記念「胃と腸」賞は江頭由太郎・他「胃 IIb 型癌の病理組織学的特徴—胃 IIb 型癌のマクロ像と組織像の対比」(「胃と腸」45: 23-37, 2010)に贈られた。

第17回白壁賞

司会の大川清孝氏(大阪市立十三市民病院)から、まず白壁賞の受賞者代表として八尾建史氏(福岡大学筑紫病院内視鏡部)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、“消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は応募論文1編と、「胃と腸」45巻に掲載された全論文が選考の対象となった。

選考委員を代表して清水誠治氏(大阪鉄道病院消化器内科)から、画像の質、論文の独創性、疾患の重要性、文章力、形態診断治療などの観点から厳密な審査が行われたことが説明された。受賞理由については、“八尾先生はライフワークとして、胃における拡大内視鏡に取り組んでこられました。本論文では、425症例を対象として、通常観察で境界がわからない病変に拡大観察を行い、その76%で境界診断が可能になったということや、拡大内視鏡観察でも境界診断が困難な病変があり、それらの組織型は未分化、中分化型、超高分化型であることが述べられています。このような多数例としてのデータはもとより、提示されている症例においては診断過程が実に克明に記載されています。1例1例において、所見のディテールを分析し、診断理論の構築にいかにも情熱を傾けてこられたかが伝わって参ります。また、この領域のパイオニアとしての自信に裏打ちされた文章にも、ぐいぐいと引き込まれます”と解説した。

「胃と腸」編集委員長の松井敏幸氏(福岡大学筑紫病院消化器内科)は、同じ施設で働いている立場から八尾氏の研究に対する実直で熱心な姿勢に感銘を受けたことに



▲選考理由を述べる清水誠治氏。



▲祝辞を述べる松井敏幸氏。

触れ、“八尾先生の功績としては、IIbの範囲診断だけでなく、基礎的な画像の問題を解決してくれました。また、画像が実際どのように見えるかについても教えてくれているので、近くで見ている私も大変尊敬しています。おめでとうございます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。続いて医学書院の社長金原優から、賞金50万円と、副賞として創刊号からの全バックナンバーが閲覧可能な「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として八尾氏は“私にこのようなチャンスを与えていただいた「胃と腸」編集委員の先生方と編集部の方々に、まず感謝したいと思います。白壁先生の名を冠した偉大な賞をいただくとは夢にも思っておりませんでしたので、本当に感激しております。ただ、この業績は私ひとりの力ではなく、長浜孝先生をはじめとする先生方、そして指導者である松井敏幸先生、そしてさらにわれわれのゴールドスタンダードである岩下明徳先生がいらっしゃったからこそ受賞できたのだと、改めてご紹介ならびに感謝を申し上げたいと思います。この仕事の発端となったのは20年位前に八尾恒良先生(佐田病院)が、「なぜ赤いのか、褪色なのか、胃癌の色調の謎を明らかにするように」と言われ、病理でまず血管ではないかと推測をし、私たちの教室の古川敬一君と竹村聡君が研究してくれまして、やはり血管であろうという知見を得ました。そして、拡大内視鏡で一生懸命血管をみてみると、今まで本当に夢のようなことが、「IIbは診断できないのではないか」と思っていたのが、できるようになりました。そのような喜びをかみしめて、この10年間、拡大内視鏡を続けてきたわけでありました。ただ、それはほんとに仕事の一部でありまして、まだまだ解決していかなければいけない問題もあります。有用性ととともにまた新しい限界が生まれましたので、皆さんとディスカッションをしながら、そして松井先生、岩下先生のサポートを得ながら、精進していきたいと思います。この場を借りて、お礼を申し上げます。本当にどうもありが



▲第 17 回白壁賞を受賞した八尾建史氏。



▲第 36 回村上記念「胃と腸」賞を受賞した江頭由太郎氏。



▲両氏には松井氏から賞状と楯が贈られた。



▲受賞者のスピーチに耳を傾ける来場者。

とうございました”と受賞の挨拶を締めくくった。

第 36 回村上記念「胃と腸」賞

次に、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。本賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られるもので、「胃と腸」45 巻に掲載された全論文が選考の対象となった。大川氏より受賞者代表として江頭由太郎氏（大阪医科大学病理学教室）が紹介された後、清水氏から白壁賞と同様に厳密で慎重な選考が行われたことが報告された。次いで、本論文の概要について解説し、“ESD が早期胃癌の標準的な治療となった今日では、根治性の観点から、

正確な病変範囲診断は不可欠です。本論文は、特に随伴 IIb を合併するリスクの高い早期胃癌の病理学的特徴を抽出し、それらのマクロ像の特徴を明らかにしたものです。随伴 IIb の進展を伴うリスクの高い早期胃癌は、肉眼型が陥凹型、組織型は未分化型および混合型、癌周囲粘膜は噴門腺領域および中間帯から幽門腺領域（萎縮のない胃底腺以外）であり、このような病変が要注意であります。また、随伴 IIb の 90 % が側方にみられることが示されており、非常に興味深い知見です。IIb のマクロ所見については、赤色・靱色といった色調変化、胃小区の変化、インゼル様顆粒、光沢感消失の 4 項目であること。これらの所見の病理学的背景についても詳細に考察

がなされています。微小癌を除く 655 例を対象にした本検討は説得力があり、臨床における画像診断の向上に貢献するものと考えられます”と賛辞を述べた。

松井氏は、“「胃と腸」では最も重要な賞を受賞されまして、心よりお慶び申し上げます。先生の長年の病理のお仕事の積み重ね、特にマクロ像を組織像と対比するという、われわれ臨床医にとって最も大切なことを完成され、そのために払われた努力はいかほどであろうかと思えます。今後ともご研鑽いただけますようお願い申し上げます”と述べ、賞状と楯を贈呈した。医学書院の社長金原優からは賞金 50 万円と副賞の「胃と腸」誌の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として江頭氏は“早期胃癌研究会はスクリーンに向かってしゃべるものと思っておりましてから、会場に向かって話す機会をいただいて非常に緊張しております。このたびは非常に歴史のある、荣誉のある賞をいただきまして、本当に感激しております。と同時に私のような若輩がこの賞をいただいているのかと少し恐縮もしています。この論文はもちろん私だけの力で受賞したのではなく、共同執筆者を含めたすべての方々にお礼を言いたいと思います。私はもともと消化器内科をしておりました。今は消化管病理に携わって、こういう賞もいただいたのですが、今日に至るには「胃と腸」と早

期胃癌研究会の先輩の中で 3 人の恩師の先生がおられまして、その先生方のおかげが大きいと思っております。

まず第 1 は、下田忠和先生（国立がん研究センターがん対策情報センター）で、下田先生が慈恵医大にいらっしゃった当時、私が消化器内科の診断技術、診断能力を高めるという目的で病理を勉強しに行くということで下田先生のもとへ伺ったわけです。当時はバブルが弾ける直前の華やかな頃で、あだ名は、「大阪から来た地上げ屋」でした（笑）。そこで 2 年間勉強し、今回のような肉眼所見の大事さと、肉眼所見と組織所見を対比して臨床へフィードバックする研究方法を初めから教えてもらい、基礎を養いました。もう 1 人の恩師は平田一郎先生（藤田保健衛生大学消化管内科）です。平田先生は、私が内科に所属していたときの先輩でもあり、病理に移ってからも指導と助言を与えていただきました。病理の道に進んだのも平田先生の勧めからです。最後の 1 人は石黒信吾先生（ピーシーエルジャパン）です。私が大阪へ戻ってから、ずっと叱咤激励をいただいております。最後になりますが、今後もこの賞に恥じないよう、また匹敵するような仕事ができるように研鑽を積み、精進して参りたいと思います”と述べ、挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に向けて、改めて満員の会場から賞賛の拍手が贈られ、授賞式は終了した。